

---

# 王子

木野子さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王子

### 【コード】

N9084B

### 【作者名】

木野子さくら

### 【あらすじ】

友人から預かった小学生は、キザな奴でした。

詩人と普通に話したからって、素敵な言葉を聞くことができるとは限らない。無理にひねり出した言葉ほど、醜いものはないと、本当の詩人は知っているからだ。美しい言葉を乱用するのは、ただの格好付け、キレイコトバの人でしかない。

四月の終わり、私はキレイコトバの人と話していた。

彼は風邪をひいたらしい。火照った顔に御手拭を当てている。

「頭クラクラする」

「家に帰りなよ。寝てたほうが良いって、絶対」

クラクラするはずの頭を大きく振って、大仰に溜め息をつく。

「わかってないなあ。僕がここに居るのは、運命なんだよ」

「運命って、何言っちゃってんだか」

私の言う事に耳を貸す様子は微塵もなく、彼は窓の外を見ながら鼻で笑う。何がおかしいのかは分からない。

「第一、誘ってきたのは貴女じゃないか」

彼の言動に、私はいちいち腹の底で笑いを堪えるのに必死だ。なんて似合わないんだろう。まだ十歳にも満たなくせに、その言葉遣いはどこで覚えたのだろうか。

友人がデートに行くだとかいう皮肉とともに、私の家においていた彼女の息子は、見事に彼女にそっくりだった。長いまつ毛、強気そうな鋭い目、薄い唇、そしてこの性格。家でテレビを見ながらお茶を飲む、なんて気まずいのでファミレスにつれてきたものの、「君を相手にしてると、疲れるわ」

「失礼だな」

平坦な声と同じく、表情に変化はない。遠回りでも、直球でも、皮肉や中傷が通じないのだ。そういえば、初めて会ったときの彼女にも苦労したな、と懐かしく感じる。

深爪になっている彼の指先は、手持ち無沙汰に机を叩いていた。

「もつとさ」

「え？」

強い視線が、私を刺す。

「面白い所、知らないの」

抑えたつもり溜め息が、鼻から出た。

時計を見ると、十時をまわったところだった。

「遊園地はいかがですか、王子」

「いいね」

王子はすぐに店を出て行った。私はレジの前で、今日の出費は全額彼女に請求しよう、と考える。

遊園地と言ってもそれほど大きくないが、自宅から一時間と言うのはありがたかった。それ以上かかれば、私は運転をしながら財布と、眉間の皺の両方を心配する必要がある。

トロツコのレールが八の字になって宙に浮いているようなジェットコースターに乗る。スピードはあまりない。隣に座る王子は、恐怖からか、とても静かだった。子供相手に優越感を感じたのもつかの間、彼はジェットコースターを降りた途端、「次はメリーゴーランドだ」と駆け出した。

凜々しい笑みをたたえる奇妙な馬にまたがった、無表情な王子が、三回目の私の前を通り過ぎると、メリーゴーランドは止まった。

降りてきた彼に、「楽しくないの？」と聞くと

「次はあのブランコだ」

と、三六〇度回転している舟に向かって走りだした。

「無視かよっ」

まともに会話が出来なくなるようになるまで、突っ立ってやる、と餓鬼のような意地を張ってみる。気付かないのだから、王子はかなり遠くまで離れていった。ふいに鼻を何かかくすぐり、「ぶえっくしょ」

と、無様なくしゃみが出る。

すると、彼は立ち止まり、振り返った。

「早くしたまえよ」

ゴフツ、という音が出た。口と鼻を同時に噴出すと、笑えなくなるのだと知る。慌ててお気に入りのハンカチで拭いた。少し悲しくなった。

王子はゴンドラの中でも無表情だった。

「楽しい？」

彼はこっくりと頷いた。

「最高だ」

「それは良かった」

母親が引き取りに来る時間は、午後八時。一日中デートのようだ。

「羨ましいこつたな」

現在二時過ぎ。これを降りたら、遅めの昼食にしよう。

面倒な事に巻き込まれた。

王子が、

「昼ご飯なんていらぬ。ソフトクリームを買ってきてくれよ」

と言つてベンチに座り込むもんだから、こんなことになったのだ。私は両手に持ったソフトクリームを、チャラチャラしたカップルにぶつけてしまったのだ。しかも、一人にソフトクリーム一つ、丸ごと全部押し付けた形だ。早足になっていたからとはいえ、これは大変だ。

「つめたあい！」

「あにすんだ、このババア！」

振り返りざまに凄んでくる。あからさまに私の方が悪いので、反論も出来ない。ババアはないだろう、と心の中だけで言う。

「すみません！ 今拭きますんで！」

鞆をあさり、ハンカチを取り出して、ハツとする。これは、汚い。先ほど噴出したときに、唾だとか鼻水だとかを拭き取った布だ。使つのを躊躇っていると、また怒声が飛んだ。

「早くせえよ！ 染みになっちまうだろが！」

「ええー、それ困るうー」

女の甘つたるい声に背筋をぞわりとさせながら、他に何か無いかとまた鞆をあさった。

突然、目の前に黒いハンカチが現れる。

「……王子……」

「ほら、早く拭いておあげよ」

やはり彼の口調が癩に障ったのだらう、男がまた怒鳴った。

「何様だあ、このガキ！」

肩をびくりと振るわせておいて、王子は男をまっすぐ見つめる。

一方で私は女の服を拭いていた。「ありがとー」と応じるころ、男とは正反対の人間のような。少し心が広すぎる、将来が不安な女性である。

「金をせびらなかつたことは褒めてあげよう」

「ごんの……！」

男が腕を振り上げた。が、その腕に女が飛びついた。

「ねーえ。着替えたあい」

「……しょうがねえなあ」

見る見るうちに男の鼻の下が伸びた。

助かった。

去っていくカップルを見送りながら、王子の小さく震える肩に手を置く。

「怖いんなら喧嘩売らないの」

「だって」

だって、とか言ってしまうところ、子供だな、と思っていると、続きがあった。

「だって、姫を守るのが、王子でしょう」「  
私は思わず目を見開いた。

「あ、貴女がそうやって、王子王子って呼ぶからっ」「  
私を見上げる彼の顔は真っ赤になっていた。

口角が上がるのを感じる。

「さすが王子様」

「当然だ」

ぼそつと言うと、彼は駐車場の方へ駆け出した。

「帰る！！」

「え、ちよつと、姫を置いていくのー？」

小さな背中を慌てて追いかけた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9084b/>

---

王子

2010年10月8日15時11分発行